

福祉の主体者 ―― それは障害をもつあなたです！

かざぐるま



194

2009. 12

目次

風：祖母の「障害のある子は福の神だよ」に励まされて （大場正昭）	2
障害者週間と実施予定事業等について（尾崎昇平）	3
はじめまして、スクールソーシャルワーカーです（中條桂子）	4
わが子とピアノ（菅沼和江）	6
トムソーヤ・クラブ 「できたね！ スゴイ！」 多くの成功体験を（山田昇）	8
わが子の巣立ちを見守って⑤ これからは 応援団！（伊藤光子）	10
本：『風が強く吹いている』 『＜子どもの虐待＞を考える』	12

風

祖母の「障害のある子は福の神だよ」 に励まされて

大場 正昭
(座間やまびこ)

2歳半のときに医者から自閉症といわれた次男はもう23歳になりました。手探りで療育方法を模索していた頃に、田舎の祖母から「障害のある子は福の神だよ」とのメッセージが届きました。でも当時の息子は、「一人ガラスの容器の中から外を眺め、周りとの接触を避けて怯えている子」でした。父親の視線も逸らすので、何故、逸らすのか判らず不安な気持ちでした。なかなか祖母のメッセージを理解できませんでした。

それから20年、若い人の中で居るのが大好きな青年に成長しています。言葉は全く出ませんが、聞く能力がつき写真カードで意思伝達ができるようになって、自分の世界を広げています。今年からケアホームに入所し、週末に帰宅する生活にも慣れてきました。職場とケアホームの暖かい声援を受けて、緩やかですが着実な成長が見られます。最近では、大きな口をあけて、発声もどきの形で意思伝達を試みています。

また、月1回の山歩きサークル「ブロッケン」に参加するのが大好きです。同世代のボランティアさんとにこやかに手をつないでハイキングしています。サポート役で参加している父親は、年頃の息子が親には見せない大人の表情でいることにハッとすることもあります。

「障害のある子は福の神だよ」とは、その子供が「家族がお互いの個性を自然に認めながら、家族の絆を強める」基軸を知らないうちに担ってくれるからではないでしょうか。わが道を行く私にも、家族の声援があり、祖母のメッセージの意味を感じる今日この頃です。

表紙のことば：イタリア山庭園（横浜市中区）

やわらかな初冬の陽射しの中での語らい

<撮影> 岡本 吉弘

障害者週間と実施予定事業等について

神奈川県障害福祉課 尾崎 昇平

◆障害者週間とは？

12月3日～9日までの1週間は「障害者週間」です。この期間を中心に、国、地方公共団体、関係団体等においては、様々な意識啓発に係る取組みが展開されます。

「障害者週間」は、平成16年6月の障害者基本法の改正により、国民の間に広く障害者の福祉についての関心と理解を深めるとともに、障害者が社会、経済、文化その他あらゆる分野の活動に積極的に参加する意欲を高めることを目的として、従来の「障害者の日」（12月9日）に代わるものとして設定されました。

◆各地での取組み

障害者週間に関連して、県内各地で記念行事が開かれます。一部をご紹介しますと、

- 鎌倉市 ふれあいフェスティバル
- 伊勢原市 ふれあい福祉まつり
- 平塚市 庁舎内で、地域作業所による写真展と製品展示即売会
- 厚木市 ともしび運動推進協議会による街頭キャンペーン
- 県立中井やまゆり園 利用者作品展
- 県立ひばりが丘学園 自閉症児・発達障害児への支援方法に関するセミナー
- 秦野保健福祉事務所 障害者週間のポスター展示と発育発達相談の実施

など、様々なイベントが開催される予定です。

◆神奈川県の取り組み

本県でも、障害者週間を記念した行事を開催します。

12月2日と3日には、県庁の新庁舎において、県の障害者地域作業所連絡協議会と共同で、障害者の作品の展示即売会を実施するとともに、障害者週間ポスターの展示を行い、啓発活動に取り組めます。

また、12月5日（土）には、厚木市文化会館にて「神奈川県障害者文化・芸術祭」を開催します。これは、今年、初めて開催するイベントで、書道や写真や手芸作品など県内各地から募集した文化・芸術作品を展示したり、音楽やダンスなどの舞台発表の場を設けたりして、障害者の文化芸術活動への理解と関心を広めるとともに、文化芸術活動の振興を図るものです。

◆文化芸術活動について

本県では、「神奈川県障害者スポーツ大会」を開催したり、「障害者スポーツ指導者」を養成したりして、スポーツについては様々な支援に取り組んできました。

一方、障害者の文化芸術活動については、環境の整備が充分とはいえない状況があります。しかし、文化芸術活動もスポーツと同様に、自己実現と社会参加のために大切な活動であると考えています。

特に、支援人材の育成は重要です。本誌8月号での港南台ひの特別支援学校の鶴見先生の寄稿文にもありましたように、教育や福祉の現場における文化芸術活動の取組みはあっても、卒業したり退所したりすると、活動を続けることが難しくなります。身近な地域における支援者を育成し、創作活動のできる場があれば、より多くの方が文化芸術活動を楽しむことができます。

また、より良い支援体制が構築されれば、将来的に、障害の有無にかかわらず、誰もが身近な地域において文化芸術活動を楽しみ、自分らしく生き生きと暮らすことができる社会の実現が期待できます。

県といたしましても、こうした視点から、人材育成や普及啓発に取り組んでまいりたいと考えておりますので、皆さまの温かいご理解とご協力をお願いいたします。

はじめまして、スクールソーシャルワーカーです

川崎市教育委員会学校教育部 川崎市・教育担当 スクールソーシャルワーカー 中條 桂子

◆新しい事業

「はじめまして、スクールソーシャルワーカー(以下SSWr)です。」とごあいさつをすると、「えっ? どなたですか?」と聞き返されることがたびたびあります。昨年度から始まったばかりのまだ新しい取り組みですから、名前自体にもなじみがないようです。

ご存じのとおりスクールソーシャルワーク事業は2008年度に始まった、文部科学省の新しい事業なのです。

全国的に始まった事業ではありますが、全国津々浦々くまなく配置されているわけではありません。各自治体によって、取り入れるかどうか、どのような勤務体制にするか、まちまちなのです。

子どもの福祉に手厚い川崎市では、昨年度からこの新しい事業を取り入れて、08年6月から1名、11月からさらに2名増員し、3名のSSWrが曜日別の担当で、総合教育センターに勤務しております。

教育委員会の7つの区担当主幹を通して学校側から要請があると、学校へ出向いたり、ご自宅を訪問してご相談にのっております。

新年度になって、川崎市では4名のSSWrが、行政区別の担当として配属されることになりました。

川崎市担当1名、中原区・幸区担当1名、高津区・宮前区担当1名、多摩区・麻生区担当1名の計4名が週4日の勤務をしております。

担当区の割り振りはありますが、それぞれの得意分野を生かしながら全区を4人でカバーするという心がまえであります。

◆何をする人ですか?

「SSWrって何をする人?」「スクールカウンセラーさんとう違うのですか?」というご質問をよく受けます。

スクールカウンセラーの先生方は、子どもたちの心に向き合って子どもが抱える問題をすこしずつ軽減なさっていくと申しあげたら良いでしょうか。では、SSWrはというと、子どもたちが抱え

ている問題を、子どもたちが暮らしている環境との不調和と考えて、環境の調整をしていきます。

お子さんの相談を受けたときに、子どもと学校という環境、子どもと家庭という環境に目を向けて、その中で子どもがどんないづらさがあるのかを探し、そのいづらさを無くしていくには何が必要かを、子どもがどうしてもほしいのかを真っ先に聞きながら探っていきます。そして一緒に方法を考えていく中で、子どもたち自身が、本来持っている力を取り戻していくお手伝いをします。

もちろんSSWr一人で環境の不調和を改善していくものではありません。保護者やご家族、学校の先生をはじめ、カウンセラーの先生、必要な関係機関と連携をとりながらチームで子どもを支えて、環境の調整を図っていきます。

それぞれの立場で支援をしてくれる人をSSWrは横糸のように紡いでいく人、子どもたちが笑顔ですごせるように、“おせっかいをやく応援団の一員”といったところでしょうか。

◆誰のための支援?

子どもに選ばれる人に! /

ここで少し自分の考えをお話しさせてください。

SSWrとして私が大切にしていることは、「どんな子どもにもしっかりと寄り添うこと」です。

相談者に寄り添うことは、どんな支援においても大切なことだと思います。そして私は、「寄り添うこと」とは、バイスティックの7原則(注1)のなかの「非審判的態度」の実践だと思っています。

ところで、日本で初めてSSWrを名乗り、実践を続けてこられた先生がおられますが、ご存じですか?

現社会事業大学教授の山下英三郎先生がその方です。先生が常日ごろおっしゃっていることをいつも胸に自分はSSWrとして仕事をしています。そのひとつは、「誰のための支援か」ということ、もうひとつは「子どもに選ばれる人に」ということです。

「誰のための支援か」：いろいろな方から相談があがってきます。先生の困り感から、親の困り感

から、でもいったい誰のための支援でしょうか？
SSWrは子どものために支援をしていきます。

そのためにSSWrは「子どもから選ばれる人になり
たい」と自己覚知、自己啓発をわすれてはいけ
ないと思っています。

いかがでしょうか、SSWrが何をする人か、ど
んな人なのか、すこしイメージがわいてきましたか？

◆知っていただくために

SSWrがどんな人で何をする人かをまず関係者
の方々に知っていただくためには、新しい取り組
みですから、宣伝がやはり大事だと思います。

川崎区でSSWrを学校の関係者の方に知ってい
ただくためにどんな宣伝をしたかをお話いたします。

まず、ミニネットワーク会議（注2）でSSWr
についてのお話をさせていただきました。事例を
挙げて、簡単なワークショップも開いたのです。
SSWrがどのような動きをするのかは、事例を示
しながらお話をするのが一番わかっていただけます。
（もちろん個人情報を守った上で具体的な
動きを説明させていただきました。）

◆川崎市の力

昨年度からご縁があって川崎市のSSWrとして
勤めさせていただき、私は「川崎市の力」をとて
も感じています。

子どものための新しい事業を積極的に取り入れ



ミニネットワーク会議の様子

る姿勢はまさに、「子どもの権利条例」を持つ川崎
ならではのと思っています。

現に子どものためにたくさんの社会資源があり
ます。その力をたくさんいただきながらSSWrと
しての活躍ができるよう、自分自身の力を養わ
なければいけないと思っています。

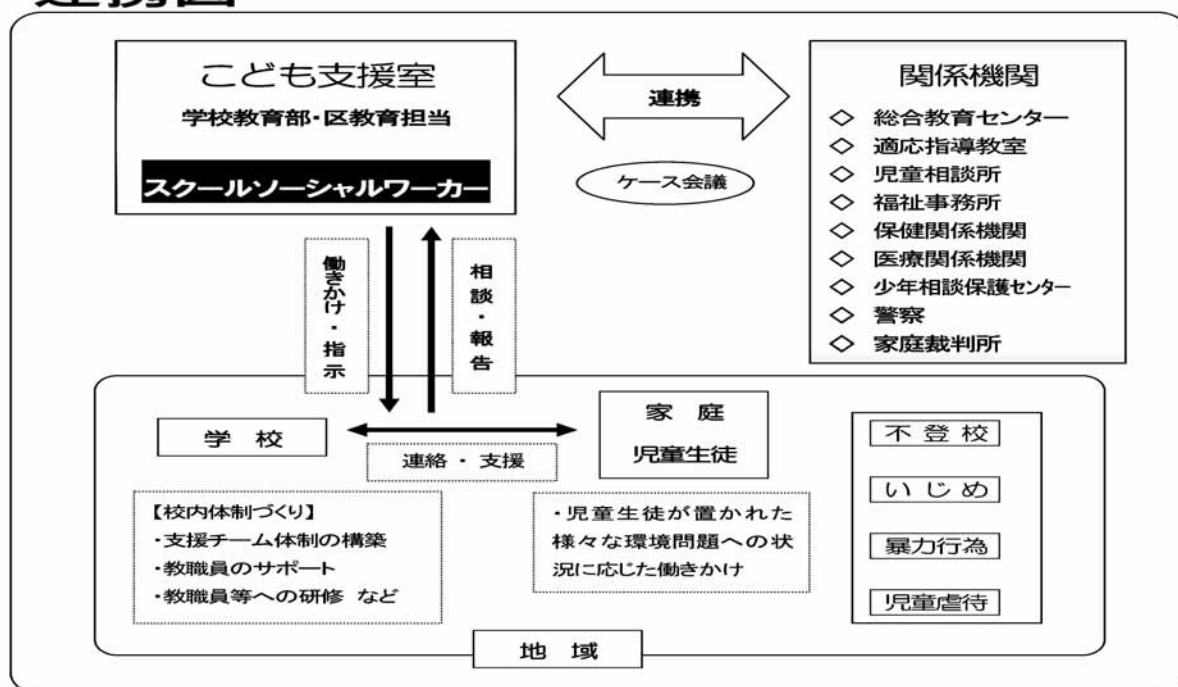
そして川崎でたくさん子どもたちと出会いた
いと思う反面、私の出番がないほうが本当は良
いのだけどもと思っています。

子どもたちのために皆さんとコラボレーションで
きますように、どうぞよろしくお願いいたします。

注1：バイスティックの7原則：アメリカの社会福祉
学者バイスティックが定義した対人援助技術の
基本。

注2：ミニネットワーク会議：川崎市教育委員会川崎
区・教育担当が独自に実施している教員を対象
にした研修。

連携図





わが子とピアノ

菅沼 和江（横浜市）

竣介がピアノを習い始めてもう7年になる。10年やっても芽が出なければ諦めようと思いながら始めたことだったが…。障害があるからできないと結果を急がずゆっくり時間をかけて育てようと自分に言い聞かせて決断したことだった。

目黒先生には竣介が参加していた自主訓練会のリトミックの講師として幼児グループ時代にお世話になった。音楽好きな竣介にとって当時先生は特別な人であったと私は記憶する。やはり縁があったのだろうか…。小3の時、偶然再会した際に先生の方から竣介にピアノを習わせないかとお声をかけていただいた。両親の「介護」という二文字と、当時いすに座っていることが苦手な竣介の状況が瞬時に私に無理だと判断させた。けれどふと思いついたことがあった…娘（竣介の妹）に教えていただくのはどうかと。娘との時間もつくれるし、妹のレッスンに付き添う中で竣介のことはゆっくりと結論をだしてもよいのではないかと考えたのだ。

それから1年、竣介はレッスンの見学に通った。この間予想外にも集中して音楽を聴いていた。時折弾く私の下手なピアノの練習曲にもよく反応した。これが思春期以降の彼の情熱を育てることになるうとは予想もしていなかった。そして小4の時、いよいよピアノに向かう日がきた。早速指がバラバラに動かずに困った。『ひとと接触することが嫌い、指先が敏感、言葉も文字も数字も解らない、こんな状態でどうやって学べるのか?…』

けれど、先生は指番号をつけた指の体操の歌を作り、竣介といっしょに歌いながら指を動かすと同時に、ご自分と竣介の指を触れ合わせることもすぐにクリアされた。またピアノを弾くという概念をはずし、1本指で決められた位置のキーを鳴らすことから始めてくださった。この時、竣介の持っているものといえば器用に動く中指、色に対

する興味と「赤」という色の名前が唯一覚えられていたこと、マッチング、そして音楽を奏でることへのあこがれだけだった。これほど少ない材料でスタートをできたのは先生の熱意と音楽療法の知識と経験、そして何より先生が「自閉症者を理解しようとする大きな窓」を開けていてくださったことに他ならない。当時の不安な気持ちを抱えた私には、竣介が音楽を楽しむことを目標に、先生が「褒めること」と「笑顔で接すること」を常に心がけてくださることに救われる思いがした。

その後も一般の自閉症児よりも知的な重さに悩まされる竣介には様々な問題が起きた。彼に学習させるためには楽譜の一般概念を超えた新しいアイデアが常に必要だ。先生が豊かな発想力の持ち主で本当によかったと思う。またレッスン中のこと、学校での取り組み、私が竣介に声をかけをする時の言葉やタイミング、それに対する本人の反応を先生はよく記録されている。この二つにより竣介のレッスンにも光が見えてきたとを感じる。またその光を本人がきちんと受けとめられる力をはじめていたことは幸運だった。この力というのは、ピアノ以外のところでの環境にも影響を受けているに違いない。たとえば介護生活への我慢や養護学校や個別指導を続けてきてくださった先生方の根気強い日々の積み重ね、妹の協力など、たくさんの環境が混ざり合って一つの方角へ進むことで出来上がってきたもののように感じる。

思春期を迎えた小6から毎年、彼を取り巻く家庭環境も次々と変化した。変化に弱い自閉症児にとってピアノは心の支えとなったに違いない。先生と弾くピアノは変わることがなかったから。

その辺りからピアノへの執着や情熱も大きなものになった。ちょうどその時期に大人になってき

た竣介のためにと先生がクラシックの曲を竣介バージョンにして用意してくださった。また母が過去に弾いていたクラシック曲がポツリポツリと自分の練習曲として登場するようになってくると、彼のやる気に火がついた。あこがれの曲だったからだろう。『上手になりたい!』『完成曲により近づきたい!』…自分の思うように弾けなかった時、竣介が初めて「悔し泣き」を父の前で見せたのもこの時期だった。心の成長の証がここにあった。また楽譜に対しても「自分のもの」という執着を見せるようになった。たとえ目黒先生であっても貸し出しすることは許さないほどの執着。練習にも熱が入る。以前は自閉症児らしく「はじめ」や「おわり」が好きだった彼が上手になりたい一心で、今では部分練習を受け入れるようになった。そして満足に弾けた時には自宅であろうと発表会の舞台であろうと素直に自分に向けて拍手!これが彼のピアノのエネルギーという感じだ。

高1になった今『アラベスク』、『エリーゼのために』(一部抜粋)、『アイダ行進曲』などに取り組んでいる。竣介用に先生がアレンジされる楽譜の記号も、より複雑になってきたのがうれしくもあり、大変でもある。1オクターブも楽々届くようになった大きな手は可能性も増やしてくれる。常に新しい課題に挑戦する気持ちが音楽を通して育てられているのを実感する日々である。

ピアノを弾くと話すと驚かれる。技術的には大したものではないけれど、彼のピアノの中には豊かな何かが存在する。音楽への愛情なのか。親としては彼の中にもひとに誇れるものができたことがとにかくうれしい。生き活きと輝く青年期の息子の姿にこちらも元気をもらえる気がする。

とにかく今は長い間まじめによく頑張ってきたことを心から褒めてあげたい。幼い頃より好きな音楽だとはいえ、はじめの3年間は母子ともにつらかった!けれどそれを乗り越えてこそ人生が変わったよねと言ってやりたい。「やればできる!」「長く続けていればいつかは芽が出る!」と竣介に教えてくれたのはピアノだ。そして数多くの人との出会いや多くの経験から成長する力、たとえ

目指す道がうまく進めないとしても、たくさんのわき道がそこから開拓されていくことの素晴らしさを私に教えてくれたのは息子だ。きっと私もそうやって育ったはずに違いないのにこの歳になって気づくとは…。

ピアノを通じて竣介は他人から学ぶという姿勢、他人の言うことに耳を貸すともっとうまくできるようになるという発見を手に入れた。このことが今後、社会へ出ていこうとする彼の助けとなってくれることは言うまでもない。大切なものをもらってこの先どう変わっていくのかが楽しみである。

わが子とピアノ…この素晴らしい種を蒔いてくださった目黒先生に本当に感謝している。そして「しゅん君といると楽しい」と仰ってくださる先生とめぐり逢えたことにも…。

竣介君、この7年間本当によく頑張ったね。あなたのおかげで、先生の四角い頭は丸くなり、丸くなったら、ある日「ゆかいなおんぷたち」が表れて私たちの強力なサポーターになってくれたね。

音符は黒いもの、音符は五線の上に描いてあるもの、私のそんなこだわりが、しばらく竣介君を苦しめてしまった。ある日、ふと思いたって画用紙に描いた丸、三角、四角。竣介君の表情が一瞬にして明るくなった日のことは、今でも覚えている。竣介君のキラキラ輝く瞳が「この音符だったら僕弾けるよ」と伝えてくれていた。

ピアノ教師の役割は、生徒さんの得意なことと苦手なことを見極め、その両面のバランスをとりながら、彼らの中にある音楽を、ピアノ演奏というひとつの表現に結びつけていくことであるが、竣介君はこれまで出会った私の生徒さんの中で、最も私のバランス感覚を刺激し、揺さぶり、鍛えてくれた生徒さんである。そんな竣介君に、私から心をこめて「感謝状」を贈りたい。これからも一緒にいろいろな曲にチャレンジしていこうね。

目黒 明子

トムソーヤ・クラブ 「できたね！ スゴイ！」 多くの成功体験を

茅ヶ崎・浜竹幼稚園 副園長 山田 昇

◆できたね～！ A君スゴイね～！

「本当だ、A君、よくできたね～！」…

周囲の先生たちから一斉に拍手と賞賛の声が掛けられます。A君は誇らしげな笑顔で応えます。その顔はとても嬉しそう。

月に2回、放課後の保育室で行われている「トムソーヤ・クラブ」の一場面です。

今から7年前、『ひとつのことにじっくり取り組むことが苦手な子、言葉や気持ちを上手く伝えられない子、遊びのルールや約束を守ることが苦手な子、ついつい友だちに手が出てしまう子、若しくは、相手の言葉や気持ちを理解しづらい子』のための『遊びの教室』としてスタートしました。

1クラス定員6～7名に対してスタッフが5名ほど付き、約1時間、ゲームや工作や手遊びなどを通して、とにかく“成功体験”をたくさん経験してもらっています。その間、保護者は別の部屋でソーシャルワーカーの先生に、日常、具体的にどのような配慮をすべきかなどを教えてもらったり、相談に乗ってもらったり、お母さん同士で悩みを打ち明け合ったりしています。

◆子どもたちの“個性”に向き合う

12～13年くらい前からでしょうか。今で言う広汎性発達障害という個性を持った子どもたちが急激に増えはじめていたことを感じました。

そのような個性を持った子どもたちは、当時、私たちの力不足で、混乱することが非常に多く、当然、その子に担任の手が取られ、担任は悩みます。すると今度は、周囲の子どもたちが不安定になり、次に保護者も…というように、本人のみならず、担任もクラスメイトも保護者も、皆、苦しんでいました。

そこで、まず、私自身が勉強するところから始めました。当時はこのような子どもたちに関する勉強会は少なく、やっと見つけた1年間の連続講座に参加しました。そして、職員全体でそのような個性を持った子を理解する努力をし、保護者に

は、その子どもの個性に関して丁寧にお伝えして、専門の施設での指導を受けるように勧めていきました。

しかし、保護者によっては、その子の個性についてお伝えすることが極めて難しく、さらには専門の施設に足を運んでもらうことがなおのこと難しいことがわかってきました。

確かに、行ったことのない専門施設に、わが子と2人、電車を乗り継ぎ、不安を抱えながら足を運ぶことなど、想像してみてもとても大変なことがわかります。

もっと気楽に、不安なく相談や指導を受けられる場所や方法はないだろうか…。いろいろ考えたあげく、たどりついた発想が、『自分の園で、園の先生が指導できれば、子どもも保護者も安心して指導を受けられるのではないか！』というものでした。

◆自分の園で指導や相談を！

そう！ 自分の通い慣れた園で、しかも、顔見知りの自園の先生から指導を受けられたら、子どもはもちろん、お母さんだって、どんなに安心だろうと考えました。

しかし、当然、当園は、療育指導の知識や技術を持ち合わせていませんでした。そこで指導に関しては、最初の2年間、民間の療育施設から指導員を派遣していただきました。そこに当園の職員が加わり、療育の知識や技術を身につけていきました。また、指導の待ち時間はソーシャルワーカーの先生のお力をお借りして、お母さんたちの相談・指導に当たっていただきました。

そして3年目からは、いよいよ当園の職員だけでの指導が始まりました！

◆効果はてきめん！

効果はてきめんでした。月にたった2回の指導で、ここまで効果が上がるものかと感心するほどでした。



6～7名の小集団で、ゆっくり丁寧に伝えてもらい、しっかりと理解し、「「できた！」という自信」は、クラスの28人の集団に戻っても大きな自信となって効果が現れました。クラスでは絶対に集団ゲームに参加しなかった子が参加するようになり、工作は苦手で一切やらなかった子が、自分からやり始めました。離席が多く、ふらふらしていた子もしっかりとよい姿勢で座っていられるようになりました。

また、指導を待っている間の話し合いの時間も、お母さん方の良い居場所となりました。

それまでは周囲のお母さんに相談しても「そのうち落ち着くわよ」とか「うちも同じよ」など、その大変さをなかなか理解してもらえないことがほとんどでしたが、この場は違います。互いに大変さを共感し、励まし合い、アドバイスし合う中で、お母さん自身が安定し、わが子の個性としっかり向き合い、理解し、良い関わりができるようになり、子どもたちがますます良い状態へと変わっていきました。

◆職員全員で力を合わせて…

5年目になる頃、クラスは2クラスに増えていました。そこでひとつの問題にぶつかりました。それはトムソーヤ・クラブを担当する職員の負担が大きすぎるということでした。2時15分まで通常の保育を行い、2時30分にはトムソーヤの打合せ、3時から4時までは指導、その後、5時半位までは指導の反省会と次回のプログラムを検討します。ほっと一息つくのは6時過ぎ。それから翌日の保育の準備…。日々の通常の保育が後回しになってしまうようでは本末転倒。

私は思い切って全職員に「負担が大きすぎて、通常の保育に支障をきたすようなら、トムソーヤ

を止めようか？」と問いかけ、話し合ってもらいました。

そして、話し合いの結果は、「トムソーヤの効果は通常のクラスでも非常に良いかたちで現れているので、このまま継続していきたい。しかし、今までのように担当職員だけに負担がかからないように、全職員がローテーションで関わっていく」というものでした。

“全職員で関わっていくこと”は、私が最初から願っていたことでした。しかも、どの職員も指導に携わることによって、このような子どもたちへの関わり方を具体的に学ぶことができ、そこで学んだことを、日常での保育で生かすことができるというメリットも生まれてきました。

さらに、数年前から、嬉しいことに、トムソーヤ・クラブを卒業した子の保護者が、スタッフとして手伝ってくださるようになり、今では中心的な存在として活躍してくれています。本当に頼もしい限りです。

◆どの園でも適した指導が受けられるように！

残念なことに現在トムソーヤ・クラブは、在園児のみで手一杯の状態、外部のお子さんはお断りしています。

しかし、本当は、どの園でも、このような子どもたちが、自分の園で、適切な環境や指導を受けられるようになることを私は願っています。

ですから、自園でこうした取り組みを試みようと思われる方は、是非、お声をおかけください。見学はもちろん、ささやかではありますが、今、私たちにできることやノウハウを、可能な限り、提供させていただきたいと考えています。

さまざまに個性を持った子どもたちが、自信をもって成長してくれることを願って…

わが子の巣立ちを見守って⑤4

これからは 応援団！

伊藤 光子（川崎市）

今年で22歳になった息子。B2（軽度）の療育手帳を持つ自閉症児である。現在は「京王シンシアスタッフ」という特例子会社に勤務して2年半になりました。京王グループ各社の清掃・植栽管理などの仕事をしています。体力的にきついこともあると思いますが、毎日休まずに元気に出動していく息子を見送る朝が今の私にとって一番幸せな時です。「気をつけてネ！」と声をかけながら心の中では『がんばれ！』とエールを送りつつ。

えっ！うちの子は障害児？

1987年10月15日、2562kgと標準より小さく予定日より2週間早く、哲（テツ）誕生！おチビながらも大病することなくスクスクと育つ。ちょっぴりおとぼけ顔だったので「あら～、おネムなの？」と声をかけられ、毎度苦笑する母でありました。1歳半健診までは…。

「言葉が遅いですネ」万事に楽天的な私も気になっていたことを指摘されて、今回ばかりは苦笑では済まされなかった。ケースワーカーや保健所の方に勧められるままに保健所主催の集まりから療育機関に週1回通うようになるのに半年もかかりませんでした。

うちの子が本当に？障害児？半信半疑のままの通園がスタート。でもこの時はまだプレ幼稚園と楽観していたのです。たくさんの遊具にひかれてご機嫌で通園する哲に対して、現実を認識するに従ってこれから待ち受けているであろう困難の数々を思い、頭を抱える私でした。が、人間、慣れというのは恐ろしいもので、生来の楽天家も手伝って哲と共に通園を楽しんでいたのです。この間に身につけた『身辺自立』によって、この後の成長がどれだけ助けられたことでしょう。通園を勧めてくださった方々には感謝！感謝！です。

先生やクラスメートに恵まれ

しかし、幼稚園・小学校・中学校と哲が成長するにつれ、何度！身も細る思いをしたことでは

う（その反動で今は、メタボ母ちゃん！）。哲が迷惑をかけているという思いが常にあり、積極的に学校の役員を引き受けたりしました。父母会には必ず出席し、特に4月は哲のことを理解してもらわなくては！とプレッシャーで、胃が痛くなるほどでした。

でも幸せなことに哲は担任の先生やクラスメート、その父母たちに恵まれました。先生には「哲くんがいるからこそまとまるクラス作りをしたい」、ママ仲間たちからも「うちの子にも思いやりの気持ちが出てきたのは哲くんのおかげ」と、親でさえ持て余してしまうほど理解に苦しむ哲に対してありがたい言葉をいただくことができ、本当にうれしかったです。その反面、どうしても先生が哲にかかりきりになるのを快く思わない親子がいたことも事実で、哲をどう理解してもらったらよいのか、これは今でも悩みの一つです。

養護学校高等部で

中学まで学区の学校へ通っていましたが、初めての電車通学がしくて、駅4つ先にある養護学校へ進学。ここで療育センターやことばの教室で一緒だったかつての仲間たちと再会！初めてプレッシャーのない4月を迎えたのでした。親子ともども居心地のよい3年間でした。今まではクラスメートにお世話になることが当たり前だったのに、お世話することもあり、戸惑う哲でしたが、バスケット部に入り、人生で最後の学生生活を楽しんでいるようでした。しかし、養護学校の3年間のなんと短いことでしょう。入学したのも束の間、進路担当の先生からの話に丸っきりついていけない私。当時は更生施設と地域作業所の区別もついていなかったのです。そんな私にママ仲間が共に施設見学したり情報交換したりと、強い味方になってくれました。卒業後4年がたちますが、今も定期的に集まり、互いの近況報告や悩みを相談したり、愚痴を聞いてもらったり、愛すべき「愉快的仲間たち」の存在が心強いかぎりです。

高2の冬には校内実習を経て校外実習へ。面接の時はずらっと並んだ会社の人の中で緊張して心臓の鼓動があまりにも早くて心配しましたが、きちんと質問に答えられたネ。社会人としてのささやかな一歩でした。

高3になると現実的に進路を踏まえた実習を2箇所経験し、哲の将来のことも考えて、親子で右往左往の堂々巡り…。卒業は目の前だ!!

わーくす大師から京王シンシアへ

養護学校を卒業し、就労支援のカリキュラムがしっかりしている『わーくす大師』へ。早速6月から外部実習で、朝早く（6時15分には家を出ていました）、土曜・祝日も出勤という厳しいものでした。『哲も頑張っているのだから、私も頑張らなければ!』、4時に起きてのお弁当作りの3ヶ月でした。この時のことを思い出すと『自分で自分をほめたい!』とは、このことか〜!と有森さん気分になる私です(笑)。2年間、わーくす大師での仕事や実習で社会への適応性を磨き、最終的には企業就労ができればいいなあ、と漠然と考えていましたが、わーくす2年目に入ろうかとしていたところに『京王シンシア』への就労を前提とした実習へ行くことに。個人の可能性を最大限に広げられるようなサポートがモットーであると同ったうえに、養護学校の先輩もいてくれるので、ママ仲間の話も聞くことができ『入社できればいいなあ』の願いは届いたでしょうか?

社会人として

2007年5月28日、第6期生として入社式に出席。晴れて京王シンシアの一員となった哲でした。自分のお給料で、大好きな温泉に行く時もガソリン代から高速代、昼食代もお父さんと折半して楽しんでいます。二十歳になってからはお酒もたしなむようになり、晩酌の時の缶チューハイやビールも自分のお金で飲んでいます。

ボーナスが出た時は「今日は僕がご馳走します」と祖父母共々、総勢5人分の食事代をレジで自分のお財布から会計をしてくれたり、そんな哲を頼もしくも思い、ちょっぴり淋しくも思うのはぜいたくなのかな?

入社して半年が過ぎた頃に带状疱疹にかかり、精神的にも緊張していたのかなと心配しましたが、



成人を祝う会で京王シンシアの作業服を着てあいさつ

この時以外は病気することなく、旅行や帰省で有給休暇を使うくらいで元気に通勤してくれてほっとしています。

京王シンシアでは2009年度上期の目標として各自の「私の好きな言葉」を毎朝の朝礼時に担当になったスタッフが発表していたそうで、哲の好きな言葉は「愛」、その理由は「みんなを守り、チームを守りたいから」と、会社の広報誌に載っているのを読んで夫婦で大爆笑! どう見てもNHK大河ドラマに影響されたと思かえず、「きっと哲の順番は月曜だったね」と納得しあうのでした。

家ではなかなか会社での話はしてくれないのですが、いろいろな所から聞こえてくる話では休憩時間はうるさいくらい明るく、人真似をして笑わせてくれたり、クリスマス会の時などカラオケで歌っている人の横でダンスを披露してくれたりしてますよと言われ、恥ずかしいやら嬉しいやら。冷静に考えると、ただのお調子者ってこと? ま、いいか、哲が楽しいのなら…。

無事に成人式を迎えた時、哲の祖母である私の母から「思いやりのある優しい子に育ってくれて、よくここまで頑張ったね。あなたも偉かったわね」と言ってもらい、こんな私が果たして障害児を育てていけるだろうか?と不安で、いつも心配をかけ、手助けもいっぱいしてもらった母に認めてもらって涙が出るほど嬉しかったです。

これからは…

これからの課題も山積み! いずれ父母はいなくなる。その時に一人で生きていく力を身につけてくれるといいなあ〜。そのために私も手助けすることを我慢して、そばでエールを送ろう! 最強の応援団になろう! ピンチの時もチャンスの時も。『フレー! フレー! 哲くん!』

『風が強く吹いている』

三浦 しをん 著

(新潮文庫 ¥860)

正月の風物詩となった「箱根駅伝」を描いた小説です。陸上競技の経験がある大学4年の清瀬灰二（ハイジ）と1年生の蔵原走（カケル）の出会いからストーリーは始まり、経験のほとんどない他の8名と、古ぼけたアパートの住人という接点だけで「箱根駅伝での優勝」の夢を追いかけます。読み始めは「こんな簡単なきっかけと気持ちだけで箱根駅伝に優勝？」と、ファンタジーを乗り越えた展開に「実際に箱根を目指している選手が読んだら気分を悪くしないだろうか」と心配までさせられる気持ちでした。

この作品の着想から執筆までに6年を要したと解説にあり、実際に無名の大学陸上部で箱根を目指し出場した人たちに取材を重ねたようです。そうした土台のためか、読むうちに徐々にファンタジーが現実味を帯び、「自分も同じような人にめぐり会って練習すれば、箱根も夢ではないのでは？」という気持ちにさせられます。

長距離走は、レース展開が天候や集団での仕掛け、心理的作戦など短距離走とは少し違い、「走る」ことの意味も「速さ」ばかりでなく「強さ」が求められます。10名の選手の性格や素質を特色のある区間に振り分けていくハイジ。「個人競技」と「団体競技」の究極の中間形態と言われる駅伝を通して、個人への心配りや組織的配慮は、駅伝に限らず対人援助に関わる私たちにとって参考にもなります。

今年の正月、初めて沿道で箱根駅伝を見ました。目の前を通過する選手は先頭から最終まで2分程度でしたが、沿道の人々からの熱は熱すぎるほどです。その熱の中の「風」は吹き付ける風ではなく、自らが“強く”走ることによって感じる風だと著者が感じさせてくれます。

(小出昇一)

本

『〈子どもの虐待〉を考える』

玉井 邦夫 著

(講談社現代新書 ¥680)

私が大学院に入学したとき、大学院の冊子を見た母が言った、「玉井先生って一度講演に来てもらったことあるよ。ダウン症のパパでね、面白かったよ」。大学院に入る本人が知らない情報を知っている母、恐るべし(私が入学した年に着任されたため、受験時には知る由もなかったわけではあるが)。そのような偶然から、講義を受けることができた。話を聞いてみると、本当である。実際に受け持ったケース(失敗談も含め)の話を交えながら、興味深く、そして分かりやすく話してくださるので、大変面白い。本著を読んでいただければ、その一片を感じていただけと思う。

さて、本著は虐待をテーマとしている。虐待と聞くと凄惨な気持ちになるか、私には関係ないわと、敬遠しがちになるかもしれない。しかし、本著は単に虐待のみを扱っているわけではない。家族の話であり、学校の話であり、支援をする側の話である。いまや、虐待はテレビの向こう側の異世界の話ではないし、子どもに関わる仕事をしている方なら、虐待ケースに出会うことは一度や二度ではないだろう。

本著のことばを引用しよう。『「子どもが好き」という思いに過度によりかからないでほしい。子どもが好きだなどというのは、こうした仕事に就こうと考えた人間にとってあまりにあたりまえすぎる前提である』かなり胸にぐざりと来ることばではなからうか。そして、このように続く。『「仕事が好き」でいてほしい』と。このことばに何かを感じた方、お読みください。

(長谷山高史)

あとがき

今年の重大ニュースは、マイケル・ジャクソンの訃報につきる。同世代であり、80年代以降のポピュラーミュージックの王様だった▼自動車産業の成長と共に大きくなったモータウン。日本の望郷演歌にも似た泥臭いスタックス。そして、ソウルトレインのテーマ曲とダンスでポップチャートを独占したフィリーサウンド。どれも、私が好きだった70年代のソウルミュージックだ。そして、マイケル・ジャクソンは

アフロ・アメリカンの社会を越えたスターになった▼アフロ・アメリカンには、貧困という影の部分がつきまとう。人種差別とギャング・薬物汚染、最近では貧困ビジネスも脚光を浴びている。先進国の貧困を考えさせられる書籍がいくつも出ている▼ところが、格差社会アメリカより、一人親世帯の貧困率は日本の方が高いそうだ。豊かになった国の、新しい貧困問題は、私たちの国をどのように変えていくのだろうか。(志賀利一)

発行：神奈川県保健福祉部
編集：小児療育相談センター
広報委員会

身近なニュース、活動報告、その他ご意見感想、素朴な疑問などをお寄せください。
＜宛先＞ 〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-9-1
小児療育相談センター 広報委員会 TEL:045-321-1721 FAX:045-321-3037
Eメール: shoniryoiku@shinseikai-y.jp